
鉛

白井文子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉛

【Nコード】

N1654W

【作者名】

白井文子

【あらすじ】

ありがちなおんなのこの物語。

ペンネームの由来はこの短編の主人公の少女です。

私小説とは少し違います。

指先だけを出した長いセーターの袖からちらりと覗いた彼女の細い手首は、私の見間違いでなければ、例の噂話の通りであるようだった。目に掛かった前髪を掻き揚げる仕草ひとつで袖は上手くそれを隠してしまった上に、私としても不自然な横目が続けるわけには行かなかったものだから、確証を得ることは出来なかったけれど。しかし、彼女に視線に気づく様子は無かった。私は顔は前に向けたまま、隣に座る彼女の体を目で辿っていく。一枚の絵でも見ている気持ちで。

体系は標準より多少細く、それでも病的な面影は全く無い。赤みがかった肌の色は、やわらかな温かみを帯びているように見える。スカートのひだから突き出した太もも、膝、ふくらはぎを順に眺めて、彼女の走る姿を思い描いた。彼女は足が速いのだ。彼女とそのことで話したことは一度も無かったけれど、私は知っていた。確かに上手に地面を蹴れそうな足だ、と思う。手首を意図的に避けながら、視線を上を滑らせていく。目に辿りついたとき、彼女も私の目を見た。黒い目だ。でも、闇の黒じゃない。

「何？ さっきから、ずっと見てるでしょ。」

彼女の体が背景から帰ってきて、フワリと私の良く知った色を取り戻す。一枚の平たい絵だった彼女が、触れられるものとして私の隣に現れる。私は曖昧に笑い、彼女に向かって肩をすくめてみせた。

「別に。気のせいじゃない。」

「変なの。」

ちょっと眉をひそめて、彼女は再び机の上に開いた本に視線を戻した。筋の無いまっすぐな指がページをめくる。まるでピアノを弾いているみたいだ。もっとも、彼女がピアノを弾くところは見たことがないし、そもそも弾けるのかどうかも分からないけれど。もし目を閉じれば、きっと細やかなメロディが聞こえただろう。ひとつひ

とつの音が絹糸みたいに絡み合うような。ページに並んだ文字たちが、彼女の胸を、まぶたを、指先を、太ももを、手首を、順番に叩くのと全く同じ音、でも違って響く音。私は目を見開くようにして彼女の指を目で追っていた。目を閉じたら、そのまま彼女と同じ絵の中に閉じ込められてしまいそうだ。

と、突然彼女が手を止めて顔を上げた。聞こえない音楽がぴたりと止まる。

「ねえ、白井さん。何か気になることでもある？」

溜め息混じりに言って、彼女は私を値踏みするような目で見る。黒い瞳が他人行儀に笑っているのが分かった。彼女はしばらくは背景に帰る気はなさそうだったから、私は改めて彼女に向き合った。

「気になるっていうんじゃないよ。」

「あんなに見てたじゃない。」

分かっているんだからね、と、瞳が付け加える。まるで彼女の意志と関わりなく動いているみたいだ、と思う。目は口ほどにものを言う、とは、よく言ったものだ。だけど、そう言った人は、彼女の黒い瞳を知らない。そのことが私を誇らしい気持ちにさせる。

「まあね。」

「何？」

「べつに。」

彼女はさも呆れた、と言うように目を伏せ、机に付いていた頬杖を解いた。軽い音を立てて本が閉じる。立ち上がってスカートの裾を軽く払って整え、私を蔑むように見下ろす。

「用がないなら私帰るから。ばいばい。」

「待って。」

咄嗟に身を乗り出してから、私ははっと俯いた。目だけで彼女を見ると、彼女は予想した通りの呆れた表情を浮かべ、人差し指に髪を巻きつけながらそっぽを向いた。

「良く分からない人だね。」

そう呟いた声が、放課後の図書室の黴臭い空気をわずかに震わせる。

私は顔を上げ、乾いた唇をざらりと舐めて、私はまた肩をすくめた。そうでもないよ、と心の中で笑いながら。そうでもないよ。少なくとも、あなたほどじゃ。

もう一度腰掛けて、半ば諦めたような面持ちで私を見た後、彼女は再び本を開いた。そして、その日は二度と背景から帰ってくることはなかった。陽が沈み、次第に橙から藍色へ変化していく空が、図書室に透き通った影を落とし始める。私は椅子を立った。「ばいばい。」とごく小さな声で呼びかける。彼女は私を一瞥し、何の表情も浮かべずに本に視線を戻してから、「ばいばい。」と呟いた。まるで私の存在を知らない独り言みたいに。私は図書室を出、窓越しに彼女を一度振り返って、彼女がもう私を見ていないことを確認してから帰路に着いた。



朝の教室で口を利くほど骨の折れることはない、といつも思う。とりわけ話したい内容があるときは。昼でも放課後でも、私が同じように思うことは分かっているのだけど。てんでばらばらにぎゃあぎゃあ騒ぎ立てるクラスメイトたちに負けじと声を張り上げて話すのはどうにも疲れることで、おまけに彼女らはいつだって話したがっているのだ。私とは違って。

私は内心溜め息を吐きながら、今し方登校してきたばかりの宏美を見つめた。彼女は、私が懸命に話したことで余程驚いたみたいだ。「そんなにびっくりしなくても良いじゃん。」

「だって、まさかあんたが行くとは思わないし。本当に話したの？ 諏訪さん？ 図書室で？」

私が話したことを、ひとつひとつ確認するみたいに大袈裟に繰り返して、宏美は腕を組んだ。おそらく本人は無意識だろうと思うけれど、宏美の動作はいちいちどこかわざとらしく見える。嫌とまではいえないけれど、好ましくも思えないのだ。私が出来ただけ控えめ

に頷くと、宏美はふうんと唸った。

「すごいね、意外と行動的なんだ。」

「そういう訳じゃないと思うけど。」

やんわりと、でも心から否定して、私は興味津々の眼差しから目をそらす。

「話すのは初めてじゃないしね。」

「嘘オ。仲良かったっけ、あんた達。」

「そうでもない……と思う。」

私は肩をすくめる。話したことがあると言っても、ほんの一言二言を交わしただけの話だ。

「だったら尚更びっくりだよ。文子、口下手なのに。」

目を丸くして言う宏美に、私は苦笑を返した。やはり彼女の表情は、どこか芝居がかって見える。淀みなく動く形の良い唇にチラリと目をやって、「まあね。」と言葉を濁す。

多分、宏美が思っている以上に、私は彼女——諏訪ゆかりのことを良く知っている。

走るのが速いのもそうだ。いつも本を読んでいること。髪を掻き揚げるとき、素早く何度もまばたきをする癖のあること。漢字はそうでもないのに、彼女の書く平仮名はとびきり美しいこと。公民の授業だけは、きまって居眠りしているか、本を開いていること。

始めのうちはただ変わった人だと思っていた。今でもその認識は変わらないけれど、そうして何となく気にしているうちに、私は彼女に惹きつけられていた。一見物静かで目立たない印象を与える彼女はしかし、よく見ていると妙に美しく抜きん出て見えた。ひとつひとつの行動や仕草が、少しずれたところにあるように浮かび上がって感じるのだ。体型も容姿も人並みなのに、指先の動きとか呼吸のリズムとか、そういうさりげない美しさを常に纏っているような、独特の魅力が彼女にはあった。

そんなこと、宏美に言ったら何と言われるだろうと考え、私はすぐにその考えを掻き消した。問い詰められるか冷たい反応を返され

るか、どちらにしろみつともなく吃る事になるのは目に見えている。宏美は相変わらず真剣な眼差しを突き刺してくる。

「それで？」

「何が？」

「昨日の話。見た？本当だった？」

ほんの一瞬、喉元で声にならないいくつかの言葉がぶつかりあって燦る。紺のセーターが落とした影が掛かり、そこだけ妙に暗く青白く見えた肌の色が脳裏を掠めていく。私は唇を舐めて、出来るだけスマートに笑おうと、湿った唇の端を吊り上げた。

「見てない。見えなかったよ。」

「そっかあ。」

宏美はそう言って口を尖らせた。がっかりすると同時に、緊張が緩んだのが見て取れる。

「まあ、今時リスカなんて、べつに珍しくもないけどね。」

「一番気にしたの宏美じゃない。」

「けどほら、身近にいると驚くよね。」

呟いた私の言葉に、悪びれもせずサラリと言う。意図しない溜め息がこぼれた。言おうとして口籠り、しばらく口の中で噛み砕いた言葉を、恐る恐る吐き出す。言い回し、抑揚、表情、全てに気を払って。

「あんまりその話、しない方がいいんじゃないかな。昨日話した限りじゃ、悪い人じゃなさそうだし。」

宏美はキョトンとして、仕方ないなあ、と言わんばかりに眉尻を下げて笑った。小さい子でも見るみたいに。私は何か幼稚なことを言ったのだろうか、と、胸の奥で紙をくしゃくしゃに丸めるような音がする。

「平気平気。悪口とかじゃないから。いいコだね文子は。」

薄く口を開いて何か言おうとしたとき、「宏美ィ。」と声が掛かった。間拔けな顔のまま固まった私と、ぱっと顔を綻ばせた宏美とが、同時に声を掛けたグループの方を向く。さっきまで高い声で笑

い合っていた人たちだ。

「何話してるの？こっちおいでよ。」

「今行くウ。」

叫び返して、宏美は私を見、子供みたいな快活そのものの笑みを浮かべた。

「じゃあ、また、なんかあったら教えてね。」

返事をする間もなく女の子たちの方へ駆けていく。私は重いくたびれを感じていた。

あのグループはどうにも好きになれない。ちゃんと話したことはないけれど、いつも大勢で騒いでいるような気がする。宏美は悪い子ではないことは知っている。だけど、こうして遠くから眺めていると、不思議と自分から話しかけたいとは思えない。彼女と同じクラスになるのは今年が初めてで、宏美が何故親しくしてくれるのか未だに分からなかった。グループに誘われるたびに拒絶する私のような子は、彼女の交友関係を妨げるに違いないのに。

少し前、「顔が暗いよオ。」と、話したこともない子に笑われたことをフと思い出す。その子の表情には露骨な悪意こそなかったが、顔中に熱い血が上って、喉がきゅうつと詰ったのを良く覚えている。「あ、えつと……ご、ごめん。」

痺れたように回らない舌を懸命に動かし、私は口ごもりながらそう答えた。その子は虚を突かれたようにまばたきしてから、すぐに笑みを取り戻した。気持ち悪いくらい迅速に。

その後の彼女の顔はもう覚えていない。もしかしたら見ていなかったのかも知れない。顔が真っ赤になっていやしいかと、只管それだけを危惧していた。そして、その嫌な予感はおそらくは的中していたことだろう。

「べつに謝ることじゃないじゃん。」

ひどく冷めた声がした。嘲笑さえ含んだように聞こえたその声が、完全に私の喉を潰してしまった。私は自分が本当に「暗い顔をした子」になったのを理解した。それは確かにその瞬間に起こったこと

だった。

宏美のことにしたってそうだ、と私は思った。私はいつまで暗い顔をしているつもりなんだろう。私が少しでも引け目を感じたら、すぐにその通りになるに違いないのに。



その日の放課後、諏訪ゆかりは図書室にはいなかった。広いとは言えない図書室には、干からびた木材のような古書の香りが充満している。元来あまり本を読まない私には、それが妙に重苦しく感じる。空気そのものが質量を持ち、本一冊一冊の抱えた年月もが圧し掛かってくるような重みだ。私は首を振る。長く伸ばした髪の毛が頬を打つ。

昨日彼女が座っていた場所に腰掛け、さりげなく辺りに人がいないことを確認した後、私は目を閉じた。手を机の上に置くと、ニスの薄い層越しに、木目の凹凸が伝わってくる気がする。その指先に、まぶたの裏に、鼻に、そして耳に、私は神経を集中する。黴と古書の匂いに混じって、昨日確かに嗅いだ石鹸の香りが流れてくること、あるいは、私の知らない絹糸のようなメロディが耳に届くことを思いながら。

暗い肌を想像する。そこに刻まれている（ように見えた）模様を想像する。太ももが座面のプラスチックに触れていやに冷たい。肉付きの良い彼女の太ももを想像する。彼女もこの冷たさを感じたのだろうか。身体が果てしなく溶けて広がっていくような感覚。まぶたの奥で椅子に座った彼女の影は、私の身体には重ならない。紙同士の擦れあう薄い音と、ページをめくる指先が浮かび上がる。私は溶けたまま、メロディを待ち望む。

けれど、それは訪れなかった。諦めて目を開くと、隣には人が座っている。個体に戻った身体に一瞬重圧がかかって、すぐに消えた。目を閉じたまま佇む自分の姿が、フと脳裏をよぎる。耳がカツと熱

くなった。そそくさと立ち上がり、そこを後にする。何だか自分がひどく馬鹿げたことをしているように思えた。



目を覚ましたら、目の前に彼女がいた。

さっきまで夢の中にあった意識はすぐには状況を認識してくれずに、私は硬直したまま彼女を見つめ、それから軋む頭で辺りを見回す。図書室だ。私が座っているのは、彼女が前座っていた椅子。私の隣に平然と腰掛けて、彼女は矢張り本を読んでいる。

ここ二日間、彼女は図書室に姿を見せなかった。私も図書室を覗くだけで済ませていたのだが、今日は何となく変えるのが億劫で、彼女の席で彼女を待っているうちに眠り込んでしまったらしい。まだくらくらする頭を手のひらで二、三回叩いて、私は深く息を吐いた。

彼女の方を向く。目が合った。すぐに目を逸らす。

「おはよう。」

そう声を掛けて、彼女は微笑んだ。隙のない笑顔だと思った。

「お……おはよう。」

「帰ったら？すぐ気持ちよさそうに寝てみたいだから。疲れてるんじゃないの。」

彼女の言葉が優しさから発せられたものでないことくらい、すぐに分かる。たちまち頬が熱くなる。

「平気。ありがとう。」

彼女の黒い瞳にチラリと浮かんだ侮蔑はすぐに消えたけれど、それが何を言いたいかは明らかだった。奥底で意思を光らせるあまり質量すら持った瞳の黒が、私に押し掛かってくる。

皮肉も分からないの？

私はぎこちなく笑って、言葉が続けた。

「用事、あるから。」

だから、皮肉は受け取れません、と、声に出さずに語りかける。伝わることはなから期待せずに。興味がないのだろう、ふうん、と適当な相槌を打って、彼女は本に視線を戻す。背景に取り込まれかけた彼女を、慌てて呼び止める。

「待って、用事、諏訪さんに。」

静かに顔を上げ、彼女は右眉だけを器用にピクリと動かす。

「私に？」

「そう。」

「この間のもそれで。」

「そう。」

大きな手に体ごと握り締められているような緊張に襲われる。沈黙が私をたっぷり苛んだ頃、彼女は小さく声を上げて笑った。私もつられて笑う。

「しっつこいなあ。」

苦笑に返す言葉は、すぐには見つからなかった。

彼女の指が本を閉じる。辺りには本当に沈黙が下りた。体まで侵食していくような剣呑な沈黙だ。私の中はしんと静まり返る。紅潮した頬が冷やされていく。もしかすると彼女も、この沈黙を感じているのかもしれない。

彼女はそれきり何も言わなかった。かといって本の中に戻ろうとする気配も見せない。私が用事を切り出すのを待っているのだ、と気づくまでには、暫しの時間を要した。

鉛の冷たさと重さを持った強い黒に押し潰されそうになる。口の中はカラカラに乾いている。おずおずと口を開けた瞬間、鉛の球にちらりと浮かんだ表情を私は見た。それは確かに、金属の鈍い光沢にふさわしい、ほんの小さな軽蔑だった。彼女自身も意識していなかもしれないほど仄かな、でもハッキリとした。

「悪い噂、聞いたことある？」

「何の？」

しまった、質問を間違えた、と内心舌打ちする。彼女は訝しげに眉をひそめている。自分の考えの浅さが恨めしかった。

「諏訪さんの。」

「ふうん。そんなのが……。」

彼女は、ふふん、と声に出して笑った。笑い声が漏れたというよりも、平仮名をそのまま読み上げるみたいに。それは一文字ずつばらばらになって、不自然に浮かび上がる。

「忠告してくれたんだ。」

「だって……………」

「ありがとう。」

私の言葉は途中で遮られた。喉元で声にならなかった台詞がクシユクシユと縮まっていく。一緒に小さくなった私の肩に、彼女は軽く手を触れた。思わず耳を澄ます。音楽の代わりに不快な雑音だけが更に大きくなって頭の中に反響した。私は顔をしかめる。

「ありがとう、ね。」

もう一度、釘をさすみたいに繰り返した彼女は、やけに大きく見えた。身長は私とそう変わらないはずなのに。少なくとも、私の手は彼女の肩には絶対に届かない。絶対に。それは今この瞬間に決められたことだ。私にはその確信がある。

得体の知れない恥ずかしさがこみ上げてきて、私は赤くなって俯いた。彼女の手が離れる。ねじが一本抜かれたみたいな気分だ。

だから、あんまり噂の立つようなことはしないで欲しい。

その言葉もまた、耳障りな音を立てていなくなった。完全には消えずに、鉤爪みたいに引っ掛かる錘を喉元に残して。私の中から言葉が消える。私はもう、何も言えなくなってしまう。

咄嗟に席を立った。

「帰るの？」

そう言って、彼女はいつもと同じように上手に笑う。ふとその笑顔を殴りつけたいと思う。そして、思った自分に慌てる。何を考えているのだろうか。彼女が何をしたと言うのだろうか。第一、私の手が彼

女の顔に届くはずなんてないじゃないか。

「帰るね、私。」

唇がそう、勝手に呟いた。

「それじゃあ、また。」

そう一言だけ言った直後には、彼女の意識はもう私にはなかった。自分がさっきどうやって発声したのか考えながら、私は鞆を抱えて逃げるように図書室を出た。

甲高く軋む扉を閉め、つい窓越しに彼女を振り返る。まばたきをひとつ、した。

彼女は、さっきまで私が座っていた席に平然と座っていた。まるでずっと前から座っていたかのように、図書室の景色にすっかり溶け込んで。あそこに座った私の姿は、ここからどう見えるのだろうか、と考える。少なくともあは見えないだろう。みつともなく背景から浮き上がった自分を想像して赤くなる。

彼女は座面のプラスチックの冷たさを感じているだろうか。否、もしかするとまだ私の体温が残っているかもしれない。私が席を立ててからそう時間は経っていない。あまりに自然すぎて忘れていたが、彼女がこうも早くあそこに座っていることが妙ですらあるのだ。まるでそれが一つの生き物であるかのように生暖かい椅子を想像して、不快感に顔を歪めた。硬いプラスチックに温かさは不似合いだ。どこことなく無理に媚びているような印象を受ける。電車の吊り革の感触が、唐突に手のひらに思い浮かぶ。あの暖かさは、どうにも好きになれない。

もう一度彼女に視線を戻す。椅子に直接触れた太ももを見る。突然、自分の足がその足に触れているかのような錯覚を覚えた。ぞわりと鳥肌が立つ。どうしてかは分からずに、私は狼狽する。スカートの裾を手で押さえると同時に、急に恥ずかしくなって、勢い良く踵を返した。もう振り向かないと心に誓って。何度か勝手に後ろを向こうとする頭を抑えながら、私はいつの間にか駆け足になっていた。



いつもそうだ。金曜日の夜は中々寝付けない。一週間が終わり、緊張が解れているのなら、早く寝られても良さそうなもののに。ベッドの中で寝返りを打つ。首が痛い。早く起きなくてもいいからと自分を甘やかしているのだろうか。かといって寝たくないというわけではないのだけれど、と、そこまで考えて、私は苦笑した。これだから眠れないのだ。もう一度姿勢を変える。中々体を落ち着けられる位置が見つからない。

無理矢理に目を閉じると、目蓋の裏に浮かんできたのは彼女の笑った顔だった。ふふん、と声がする。

「ありがとう。」

彼女はそう言っ私に触れたのだった。あんなに容易く触れられるだなんて。否、それはあくまで一方的なものだ。喉の奥に詰っていた言葉が、少しずつ蘇り始めた。羽毛布団の中でしか好きなように喋れないのだ。もどかしくて仕方ないが、そうでない自分など想像出来ない。喉と通じ合えた私は、例え目蓋の裏にすら存在し得ない。元の形に戻った言葉を、恐る恐る声に出してみる。

「だって、嫌でしょう？悪口言われるの。」

「平気平気。悪口とかじゃないから。」

宏美が頭の中に割り込んできて、私はギョツとする。諏訪ゆかりの表情は隠れて見えなくなってしまう。

違う、今のは諏訪さんに言ったんだ。宏美を掻き消そうと首を横に振った。肝心の諏訪ゆかりからの返事は返ってこない。宏美がくすくすと笑う。

「ねえ知ってる諏訪さんって自傷癖があるんだってお家の事情が複雑らしくてそれで学校でも孤立しちゃったものだから病んじゃったらしいのそれでねこれは聞いたことなんだけどなんでも今は精神科に」

私は目を開けた。宏美も諏訪ゆかりも、一気に消えた。目の前には、ただ無表情な壁があるだけだ。深い溜め息がこぼれる。

そう言えば、今日の体育の時間もだ、と思う。息継ぎに欠けた宏美の声から逃げ出すみたいに、でも逃げだとは思わないように自分に言い聞かせながら。そう、今日も、彼女は誰よりも速く走った。

種目はリレーだった。彼女の走順は八人中六人目。走者への黄色い声援が飛び交う中、彼女は黙って髪を指で弄んでいた。他の女の子達がお喋りしながらするのと同じ仕草なのに何が違うのだろう、と考えたのを覚えている。何が彼女をここまで美しく見せるのだろう。目つきでも、指先でもない。顔立ちとも無論違う。

スタートラインに立った彼女は髪を風に流し、無表情のまま遠くを見つめていた。リレーのコースや先にバトンを受け取った走者の背中を見ているのではないことくらい、すぐに分かる。背後からは彼女のチームの青いバトンが迫ってくる。

そして、彼女は走り出した。

私は息を吐いた。しっとりした倦怠が体を襲っている。風を切って走る彼女の姿とは正反対の、湿ったように重い体をうつ伏せにする。誰に何を見られたわけでもないのに、妙にきまりの悪い気がした。

いつのまにか眠りに落ちていた。それは寝付けなかった割には深いものであったようで、夢はひとつも見なかった。

夢を見ずに目覚めた朝は、いつも掴みどころのない空しい恐怖に襲われる。無事目覚められたことが奇跡であるともいうような。一歩間違えれば、音も色もない眠りの中に閉じ込められていたかもしれないのだ。そう考える度に、手を強く握り締めたくなった。



月曜の朝にも夢は訪れなかった。私はごく静かに目を覚まして、ほとんど反射的に身震いした。目覚ましが鳴る前に起きたものだから

ら、その分のろのろと着替える。指はボタン一つ留めるのも億劫だった。結局家を出たのはいつもより少し遅い時間だった。

朝の教室は異様な雰囲気包まれていた。今登校してきたばかりの私にも分かるくらいなのだから、相当だ。ギョツとして辺りを見回し、その場に硬直する。原因はすぐに分かった。それはあまりにも色濃く、私の視界に飛び込んできたのだ。

白い肌に傷跡が走っている。眩しいほど赤く、毒々しく、言い知れない存在感を放って、線はしなやかな左手首を切り裂いていた。半袖のシャツを体の一部のように着こなして、諏訪ゆかりは悠々と本を広げていた。

その光景から目を離せぬまま、カッと頭に血が上るのが分かった。女の子たちに遠巻きに囲まれながら、彼女はまるで自分ひとりだけの世界にいるように見える。微笑さえ浮かべた表情から感情は読み取れない。時折、まるで見せ付けるように左手で大きく髪を掻き揚げた。その度にクラス中から驚きと呆れ、そして恐怖を含んだ視線が突き刺さる。

頭の中がひどく熱くなっていた。漠然とした複雑な心持の中には、確かに憤慨が混じっていた。理由ははっきりと分かっていたのに、頭の中ですらそれを言葉にすることはできなかった。彼女は何度も同じ仕草を繰り返す。黒い瞳はその間絶え間なく見開かれ、爛々と輝いていた。

何がそんなに楽しいの。

私は彼女に向けて内心で叫ぶ。届くはずなどない。揺らぐ視界の中で、彼女の体はグロテスクな傷に覆われ始めていた。彼女のあんな目の色を見たのは初めてだ。馬鹿にされて、陰口を叩かれて、何であなはそんな目をするの。

後ろから肩を叩かれて振り返ると、苦笑を浮かべた宏美が立っていた。目が合うと宏美の表情は、さも可笑しげな笑いを堪えたようなものに変化する。慌てて身を引いた。背筋が粟立つ。

「アレ、本当だったねえ。」

囁くように言う。私は目を逸らした。表情には苦笑を、目には嘲りを、声色には批難を宿して、私に一体どうしろと言うのだ。ずっと見つめていたら、宏美はいくつかのパーツに崩れてしまうような気がする。表情を浮かべないように心がけながら俯いた。

宏美は決して諏訪ゆかりを咎めている訳ではない。表情も視線も声色も、意識の外で作り上げられた、ある種純粹なものなのだろう。それが分かっているからこそ、私の中から言葉がなくなっていく。黙り込んでしまうことで、私もまた宏美の純粹な嘲笑に晒されるのだと知りながら。舌が重い。分厚いなめくじのようになたうつそれは、口の外に居場所を求めて存在を主張し始める。今まで平然と口腔に収まっていたのが嘘のようだ。少しでも気を休めようものなら、舌は喉に詰って、私の息の根を止めてしまうかもしれない。

舌が飛び出さないようにぎゅっと唇を結んだ私に、宏美が手招きする。

「とりあえずこっちおいで、文子目立ってるから。」

そう言われてはじめて、自分がひどく不自然な位置に立ち尽くしていたことに気づく。諏訪ゆかりと微妙な距離を保ちつつ、内緒話の輪には加わらない。数人の視線は私にも向けられている。慌てて宏美に駆け寄った。そのまま輪のひとつに迎え入れられる。

五人の女の子たちの目が、一斉に私に向けられた。十個の目玉が並んで私を囲んでいる。睨んでいるのだ。薄笑いを浮かべて。胸を掻き乱されるような感覚。爪先が、凍りついたままだじろいだ。

不意に宏美の手が手首に触れる。ゾクリ、そこが電流から電流が走ったかのように鳥肌が立ち、気がついていたら体ごと手を引いていた。ほとんど払いのけたようなものだ。宏美のきよとした顔を見た途端に、血の気が失せた。何やっているんだろう。十個の目玉は依然として私を睨み続ける。それらは全て宏美のものだ。震える足でもう一步後ずさる。

「あ、私、トイレ行って来る。」

何に対しても分らない弁解をして、そのまま教室を飛び出した。

無数の視線が背中を突き刺している気がした。痛みすら感じる。蚊の鳴く様な自分の声が体中に反響していた。上ずった声には薄笑いが浮かんでいた。気味が悪い。

後にした教室を一目だけ振り返る。三つか四つの輪と彼女。まるで模型のようだ。

さっきまで私はあの中にいたんだ。あの輪の一つの中にいたんだ。声にならない声が漏れる。鳩尾の下のほうから、熱く煮えたぎった何かがせり上がって来る。それが喉元まで届く前に、すぐ近くのトイレに駆け込む。自分の言葉を果たしたことに安堵した瞬間、熱は勢いを増した。悪い風邪にかかった時のことが脳裏を掠めていく。個室に入って鍵を閉め、床に座り込む。

私はさっきまであの輪の中にいたんだ。胸を過ぎただけの言葉はしかし私を呪縛する。胸を、腹を、首を締め付けて、内臓を全て吐き出させようとする。あの輪の中にいたんだ。反響する言い訳。十個の目玉と同じ薄笑い。頬が引き攣る。熱は喉より上へは上ってこない。いっそ、搾り出されるままに吐き出してしまいたかった。

左の人差し指を恐る恐る口中に差し込んだ。舌の奥をぐいと押すと、獣のような呻き声が漏れる。熱を持った口蓋と舌に挟まれて、指は更に奥へ奥へと進もうとする。じわり、口腔に唾液が満ちた。いくら指を飲み込もうと努力しても、出てくるのは空咳と粘ついた唾液ばかりである。喉の奥ではまだ沸き立った吐き気がのた打ち回っている。涙が滲んだ。

ためらいがちに引き抜いた指は、濡れそぼって白くふやけていた。スカートの裾に擦り付けて拭き取る。格好悪い。只喉を鳴らすだけの咳は止め処なく溢れ続ける。泡の浮かんだ唾液が口の端を伝い、糸を引いて便器の底へ吸い込まれていった。

僅かに痺れた左手を顔の前に翳す。右手でなぞった手首はいやに冷たくてすべすべしていて、自分のものではないような錯覚を覚えさせる。不意に毒々しい赤色がその上にちらついて、思わず左手を放り投げた。力の抜け切った膝が震える。

結局、教室に戻ったのは、ホームルームの開始を知らせるチャイムが聞こえた後だった。



授業中も、休み時間も、彼女は自分の席に座ったまま微動だにしなかった。目立つ動きといえば、読む本のページをめくるか、あの髪を掻き揚げる仕草のみ。視線は常にページの上に注がれている。

彼女自身に向けられる視線すら、そこに受け流しているかのように。彼女を直視することは憚られた。誰に後ろめたい訳でもないのに、私は彼女をちらと見ては目を逸らし、また見るといった動作を繰り返していた。いつもなら時々目が合うこともあるのに、何度私がそちらを向いても、彼女には表情一つの変化もなかった。黴の匂いこそ無いものの、彼女はいつも図書室でしているように、一枚の絵と化していた。そして、ページのめくり方、足を組む角度、髪に触れる左手を翻すやり方、全てにおいて、彼女の均整は、一点を除いては不自然なほどに乱れなかった。その美しさは彼女の明確な意志によって成り立っている。それは確信だった。どうしてそう思ったのかは、自分でも分からないけれど。

均整を崩しているのは彼女のあの目だった。はちきれそうな意思が瞳の奥で蠢いている。二つの黒い鉛の球だけは、絵の中から浮き出していた。

彼女が動くまでは、私も席に釘付けられて動けないのだ。

宏美が時折私のほうをちらと見ることを、私は知っていた。その度に指先まで神経をはりめぐらせて息を止める。見られている、見られている、と、頭の中で反芻しながら。宏美が目を逸らすと、私は生き返った。そして彼女を見る。さっき見たときと全く変わっていない。そっと息をつく。

そんな風だったから、終礼の後に彼女が席を立ったときには、私

も急いで立ち上がった。あまり焦ったものだから、椅子が床と擦れて耳障りな音を立てた。けれど、彼女はこちらを見なかった。

彼女の行き先は、歩き出してすぐに分かった。やがて足を止め、図書室の扉を開いて、彼女はまるで壁の中に溶けるようにそこに入っていた。ガラス窓の着いたスライド式の扉は、僅かな隙間すら許さずに閉まった。

ガラス一枚とは思えない距離を隔てて、背中が遠ざかっていく。文庫棚から一冊抜きとって、椅子に腰掛ける。いつもの席だ。そして、あつという間にその体は動きを忘れる。爛々と光る意志の塊は、すっかり穏やかになっていた。文章を追う動きが僅かながら感じ取れる。視線はただページの上だけに注がれていた。が、彼女は紙に刷られた文章以上のものを、ページを透かして見据えているに違いない。

静かに扉に手をかけて、すぐに離す。ひんやりした手首の感触が右手に蘇った。

「顔が暗いよオ。」

不意に頭の中に声が響く。周りに誰も居ないことは、振り返らなくても分かる。私はガラス窓に背を向けた。ここは、「顔が暗い子」のいい場所じゃない。その思いに屈辱は混じっていなかった。ただ静止した諦めと、深雪に覆われたような寂寥があるばかりだ。

そのまま家に帰った。吐き気を伴う激しい嫌悪感、胸の奥で冷え固まって座り込んでいる。ただいま、といつも通りに発した言葉まで、その塊に跳ね返って不愉快な響き方をする。胸の真ん中を強く押してみる。痛い。丁度、人工呼吸のマッサージで押すように習ったところだ。健康な人にマッサージを行わないように、との注意書きが思い起こされたけれど、構わずそこを押し続けた。息が苦しい、気もする。こんなことで止まった呼吸が蘇るのだろうか。見下ろした自分の手はやはり心許ない。いくら習ったって、きっと私には無理な芸当だ。手をだらんとぶらさげるようにして脱力し、胸を解放する。深く息を吸い込むと、詰った塊が一度、じくんと疼いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1654w/>

鉛

2011年10月9日14時52分発行